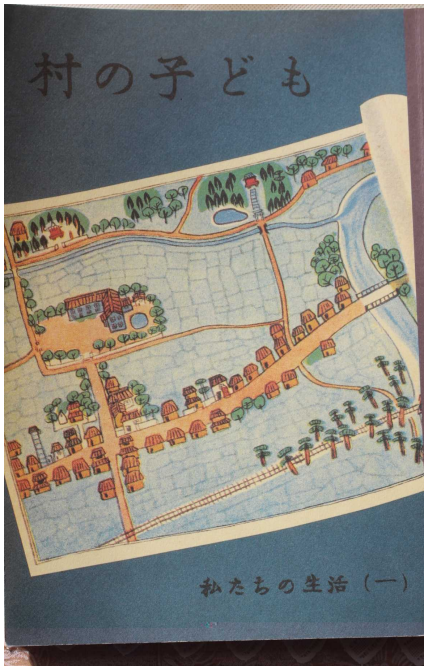
社会科小学校　第五年用　村のこども
～私たちの生活（一）～



昭和二十二年九月十五日翻刻発行
昭和二十四年十一月十五日修正翻刻発行
（昭和二十四年十一月十五日文部省検査済）
（　　）

三郎君もいよいよ五年生になりました。急ににいさんいなったような気がして得意です。教室も二階になり、窓からは運動場で下の学年の子どもたちが遊んでいるのがよく見えます。

しかし、三郎君の得意なわけはほかにもあります。それはこんどから、おとうさんのかわりに、毎朝牛乳をとなり町の集乳場までもっていくようになったことです。五時半に起きて、床をかたづけ、顔を洗い身じたくをして、牛小屋にいくと、おとうさんが、牛乳の輸送かんを用意しておいてくださいます。三郎君は、それを自転車につんで、すぐ出発するのです。

家からとなり町の集乳場までは、およそ三キロあります。だから六時半までにもっていくのにはおおいそぎです。

けれども、このごろのように気候のよい朝、県道を自転車をとばしていくのはゆかいです。ことに松崎橋まではくだりですからいい気持ちです。

三郎君が口笛を吹きながら走っていくころは、もう春の日はかなり高くあがっています。右がわの家々のかげになっているまつ林のむこうから、太平洋の波の音がきこえてきます。あたりの麦畑からは、しきりにひばりのさえずる声がします。たんぼでは一寸そらまめがいっぱい実をつけています。西の方の山々にはかすみがかかっています。鎮守の森をはずれると急に景色がひらけて、右手に海が見えはじめます。

そして、そのむこうにとなり町の家々があらわれてきます。松崎橋を渡ると、道は少しのぼりになります。

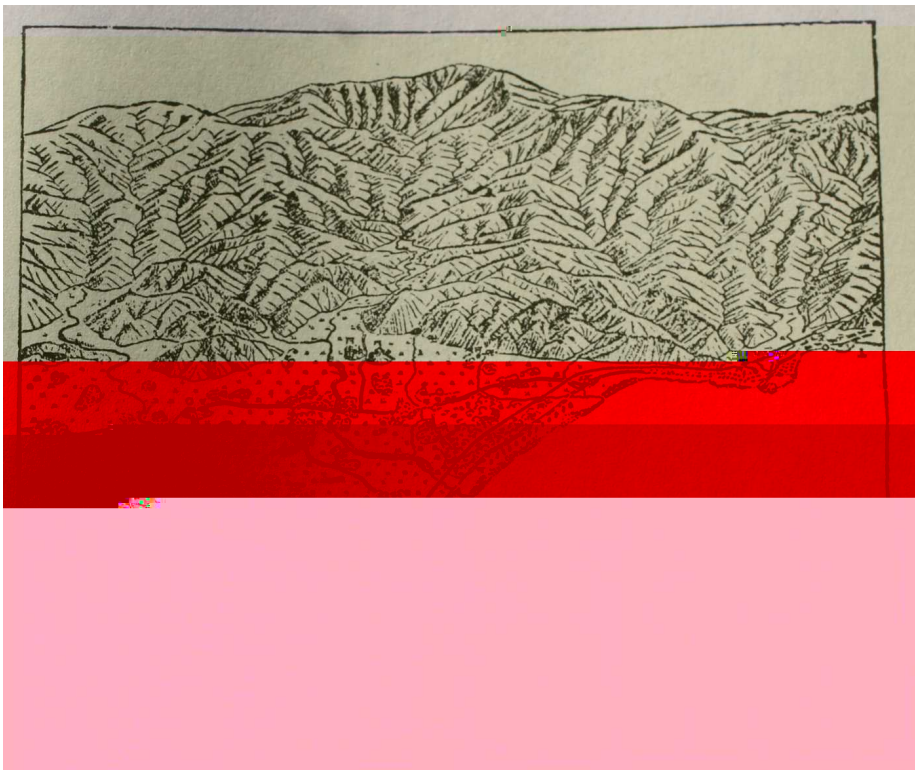
これまで三郎君は、ここからのぼりになるということをあまり感じていませんでしたが、重い輸送かんを自転車ではこんでみて、はじめてはっきりとそれがわかりました。橋から集乳場までは、約一キロですが、いきにはどうしても汗でびっしょりになります。

集乳場につくと、組合の人が「ご苦労さん」といって輸送かんを受け取ってくれます。三郎君は、この無口な組合のおじさんがなんとなくすきで、ご苦労さんといわれるとうれしくてたまりません。

帰りはたいそうらくです。橋の所まではすぐきてしまいます。橋の所からは旧道を通ります。道は少しわるいけれどもだいぶ近道になります。帰りにはきまって、橋のところで上の山のにいさんが銀行に行くのにあいます。そして鎮守さまの裏手あたりでは、松山先生ともよくお目にかかります。

松山先生は、一昨年となり町の学校に御栄転になったのです。上の山のにいさんも松山先生も、三郎君を見るとにこにこして、「よう」と声をおかけになります。

家に帰ると、たいてい七時少しすぎになります。からの輸送かんを牛小屋へ置き、自転車を土間に入れ、井戸ばたでからだをふき、手足を洗ってあがると、もう朝食のしたくができています。



おかあさんは、いつでもコップに牛乳を入れておいてくださいます。三郎君は、このしぼりたての牛乳をのむのが楽しみです。往復六キロの自転車のりのあとでは、たいそうおいしいのです。

朝食をすませて、かばんにいれていくものをもう一度しらべているころには、もうおとなりの弘君がさそいにきます。弘君は三年生です。学校へは、近くのものがみんなさそいあわせていくのです。

途中に鉄道のふみきりがあるので、三郎君や近所のくに子さんは、とくに下の学年の人たちを残さないようにつれていくことにしています。

学校は三郎君の家から約一キロ、村役場のとなりで県道に面しています。

三郎君もくに子さんも学級の新聞係りの委員ですから、教室にはいると、すぐ掲示板をしらべたり、投書箱をのぞいたりして、それから道具をおいて運動

場に出てみんなと遊びます。
　今学期のはじめ、先生からのお話によって、三郎君たちの組は次のようなことをきめました。

一、人々の生活のしかたをしらべよう。
二、自分たちの生活を少しでもよくするためにはなんでもしよう。

　これが、学級の標語になって、教室の前の壁にかかげられています。字は、級長の山本君が書いたのです。学級新聞も、この標語を実行する方法の一つとして、学級自治会できまったことなのです。学級新聞の委員は、三郎君やくに子さんのほかに、上田進君、金子すみ子さん、上田はる子さんの三人がいます。
　毎週木曜日までに、学級のものがみんなに知らせたいと思うことや、みんなが知っておいた方がよいと思うことを、ニュースとして紙に書いて、投書箱に入れておくことになっています。